



Supported by:公益財団法人松下幸之助記念志財団

調査結果と考察

有度(うど)丘陵に所在する「ふじのくに地球環境史ミュージアム」自然観察路及び伝統農法を実践する菊川市の茶草場(ちゃぐさば)において、昆虫調査を行いました。

■ミュージアムの自然観察路:

3/23、5/24、7/12、9/20-21、10/25の計5回の調査を実施しました。昆虫の任意採集やライトトラップ等による昆虫の捕獲調査を実施し、ソーティング作業等を行いました。また、標本作成を行い、過年度を含めた昆虫標本の蓄積と同定分析を継続しています。今年の調査で約1200個体の昆虫が採集され、標本化されました。そのうちキイロアトキリゴミムシ、ハイロチビタマムシ、ズグロキハムシ等がこれまでこの場所で確認されていなかった新記録種でした。今年度は蓄積されている標本のうち甲虫類について整理・種同定を行いました。結果、49科415種の甲虫が確認されました。その他にも未同定の種が残っていますので、今後はさらにそれらを同定・分析していきます。

■茶草場:

茶畑に敷くためのススキやネザサを採集するために維持される草地である茶草場において、10月4日に昆虫相調査を実施しました。今回の調査では、10目37科59種を採集・目撃しました。

■ミュージアムの自然観察路:

新記録種が複数見つかったことから、この場所の昆虫調査は未だ十分ではなく、これからも調査を継続することでより詳しい昆虫相が明らかになるものと考えられます。甲虫類を科別にみると種数の多い順から①ハムシ科(64種)、②ゾウムシ科(55種)、③ハネカクシ科(37種)、④オサムシ科(36種)、⑤テントウムシ科・カミキリムシ科(25種)であった。通常、調査

が進むとハネカクシ科の種数が最も多くなることが知られていますが、今回の結果を見るとハムシ科との確認種数の差を見るとハネカクシ科の解明度が低く、特に土壌性種等の調査が不十分であることを示していると考えられました。

■茶草場:

世界農業遺産に認定されている「静岡の茶草場農法」は茶畑の周辺にススキやアズマネザサの二次的な自然草原(茶草場)が維持されており、そこには、草原性の希少な植物が生育しています。茶草場の一つ一つの面積は小さいものの、茶畑、雑木林など利用形態が異なる里山環境がモザイク状に維持されています。このような里山環境を生活の場とする昆虫類がどのような生活史を送っているのかが明らかになることが期待されます。

今後の見通し

昆虫類の種の多様性は膨大ですが、市民の協力により調査し、標本化しながら、少しずつデータを蓄積することで、全貌に近づくことができるだろうと考えています。まずは、同定が可能な群からリスト化を進め、本地域の昆虫相の特性を明らかにしていく予定です。今年度は甲虫相を取りまとめましたが、リストを精査すると、未確認の種がまだずいぶんありそうですので、更なる調査も必要です。また、外来種の侵入や温暖化による分布拡大種を捉えることで、生態系の変化を継続的に見続けることができるでしょう。これらの調査地にどのような昆虫・生態系が存在するかということを調査し、指標生物の調査を進めながら、その変化を見続けながら市民と共に見守ることができれば、将来的なOECM(保護地域以外で生物多様性保全に資する地域)としても機能するのではないかと考えています。

調査の概要

私たちの周りは、様々な生物であふれています。目立つ鳥やきれいな花の他にも、目に見えないほど小さな虫や土の中の菌類など、深山や密林にでかけなくても、身近な自然のなかにたくさんの生物がくらしています。地域の生物多様性は、長い地史的な時間と有史以来の人と自然の関わりの中で形づくられてきました。生物多様性を理解するためには、「どんな生物がすんでいるのか」ということと、「生物たちがどのように関わりあってくらししているのか」を知ることが重要です。

このプログラムでは、静岡市とその周辺にある里山の植物や昆虫及びそれらの関りについて調査します。

一見何の変哲もないように見える都市近郊の自然のなかにも、まだよく分かっていない「もの」(生物)や「こと」(関係性)があふれているはずで、具体的には捕虫網や罠を利用して、網羅的に昆虫を捕獲し昆虫相を調べます。

そうした調査を通じて都市近郊の里山生態系の一端を捉え、可視化することを目指しています。

【調査地】 静岡県静岡市・菊川市

2025年3月～10月 35名

菊川市における10月4日の調査で採集・目撃した昆虫

目名	種数
ハサミムシ目	1
トンボ目	4
カマキリ目	2
バッタ目	9
カメムシ目	10
アミメカゲロウ目	1
コウチュウ目	13
チョウ目(ガ)	2
チョウ目(チョウ)	9
ハチ目	5
ハエ目	3
計	59

参加者の声

一つの里山での継続した生き物調査によって、少しずつ変化を感じることができました。

常に環境は変化しており身近な生物の変化を知る事で、その変化を確認したり知ることができると感じます。

都市近郊ということもあり、こんなに身近なところに昆虫がたくさんいることに何より驚きました。

茶草場の見た目が1年で劇的に変わってしまっている場所もありました。動植物が草原性から森林性の動植物に移っていくのに立ち会っている感覚があります。

主任研究者

岸本 年郎 先生 ふじのくに地球環境史ミュージアム 教授

早川 宗志 先生 ふじのくに地球環境史ミュージアム 准教授

自然観察路で確認した昆虫

目名	科名	種数
ゲンゴロウ科	Dytiscidae	1
オサムシ科	Carabidae	36
マルハナノミ科	Scirtidae	4
タマムシ科	Buprestidae	12
ヒゲナガハナノミ科	Ptilodactylidae	1
ヒメヒゲナガハナノミ科	Cladotomidae	1
コメツキムシ科	Elateridae	15
ベニボタル科	Lycidae	4
ホタル科	Lampyridae	4
ジョウカイボン科	Cantharidae	12
エンマムシ科	Histeridae	2
ガムシ科	Hydrophilidae	1
クワガタムシ科	Lucanidae	3
センチコガネ科	Geotrupidae	1
コガネムシ科	Scarabaeidae	17
ヒゲトチビシデムシ科	Colonidae	1
タマキノコムシ科	Leiodidae	1
ハネカクシ科	Staphylinidae	37
カツオブシムシ科	Dermestidae	1
ヒョウホンムシ科	Ptinidae	4
キスイモドキ科	Byturidae	1
ジョウカイモドキ科	Merylidae	3
ハナノミ科	Mordellidae	5
ハナノミダマシ科	Scraptoidea	2
カミキリモドキ科	Oedemeridae	3
アカハネムシ科	Pyrochroidae	1
アリモドキ科	Anthicidae	1
キノコムシダマシ科	Tetratomidae	1
ナガクチキムシ科	Melandyridae	1
ツツキノコムシ科	Ciidae	1
ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae	18
アトコブゴミムシダマシ科	Zopheridae	1
ヒメマキムシ科	Latridiidae	2
ミジンムシ科	Corylophidae	2
テントウムシダマシ科	Endomyzidae	4
テントウムシ科	Coccinellidae	25
オオキノコムシ科	Erotylidae	6
オオクスイムシ科	Helotidae	1
ヒメキノコムシ科	Sphindidae	1
ネスイムシ科	Monotomidae	1
ケシクスイ科	Nitidulidae	14
クスイムシ科	Cryptophagidae	3
ホソヒラタムシ科	Silvanidae	1
ヒメハナムシ科	Phalacridae	1
ヒゲナガゾウムシ科	Anthribidae	8
オトシブミ科	Attelabidae	7
ゾウムシ科	Curculionidae	55
カミキリムシ科	Cerambycidae	25
ハムシ科	Chrysomelidae	64
合計	49科	416